**「この家に平和があるように」**

**年間第14主日・Ｃ年（16.7.3）**

**収穫が多いが働き手か少ない**

今日の福音は、教会の本来的使命を、具体的に報告している個所と云えましょう。つまり、教会とは、福音を伝えるために、全世界に派遣されている宣教共同体にほかなりません。

　ですから、教皇フランシスコは、その使徒的勧告『福音の喜び』で、次のように強調しておられます。

**「福音宣教は教会の務めです。・・・確かに、教会は三位一体に根差す神秘ですが、福音を告げながら旅する民の歴史的な具体性を持っています。・・・教会は、神が与える救いの神秘としてイエス・キリストから派遣されました。教会は自らの福音宣教の活動を通して、神の恵みの道具として神に協力します。神の恵みは、たえず飽くことなく働きます。」（『福音の喜び』111-112項）**

かれこれ45年ほど前にさかのぼりますが、わたくしが初めて主任司祭として担当した仙台の小教区での体験です。最初、若者たちが、毎週ミサに参加するだけでは、イエスの宣教命令を、我々の教会が、実行していないのではないか、と根本的な問題意識を持つようになりました。そこで、彼らは、まず手始めに近所の家々の郵便受け箱にパンフレトを入れることから始めたのであります。けれども、無断で、人さまの郵便受け箱にパンフレットを配ることは、地域の人びとには受けが悪かったのであります。その試みを反省した結果、今度は、教会の正式な宣教活動はあくまでも共同体ぐるみで行うべきという結論に達し、まず、毎月の第一主日を「宣教の主日」としたのであります。

したがって、方法としては、今日の福音にありますように、二人ずつのペアを組織しました。たとえば、シスターと青年、中年の男性と若い女性というふうに、10組ぐらいに編成したのでありまず。そして、近くの団地の約250戸をターゲットにしました。そこで、ミサ後、まずその日に配付するパンフレットの読み合わせを行い、それから、婦人会が用意したランチで腹ごしらえをした後、二人ずつペアに成って団地に入り、一軒一軒個別訪問しました。「カトリック教会からまいりましたと、」と身分を明らかにし、「若し読んでいただけるなら、このパンフレットをどうぞ」と言って一部ずつ各家庭に配るという単純な宣教活動であります。そうしているうちに、ある信者さんは、同じパンフレットを、自分の職場でも配りたいと、職場にパンフレットを持ってでかけました。

　そこで、その宣教チームに参加出来ない信者さんは、その日にそれぞれ自宅で祈りによって参加してもらいました。とにかくそのような毎月のまさに教会ぐるみの宣教活動は、確かに手ごたえがありました。毎月の個別訪問を重ねることによって、まず、その地域の方々との接点ができたので、毎月そのパンフレットを受け取るのを楽しみに待っておられる人たちも出て来ました。また、ご自分の自宅を開放するから、聖書の勉強会を開いて欲しいなど、まさに喜ばしい反応をも確認できました。

**この家に平和があるように**

ところで、今日の福音でイエスは、派遣に当たって弟子たちに次のように命じられました。

**「収穫は多いが、働き手が少ない、だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持って行くな。・・・どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。・・・また『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。」**

　このように、福音宣教に当たって、まず、祈りから始めるべきと確認できます。

　次に、福音宣教には様々の危険も伴うということであります。例えば極端な例として、宣教活動の結果、迫害を受けるかもしれないということです。

　例えば、お隣の中国では、今なお共産党独裁政権による迫害が続いております。先日の毎日新聞（2916.6.22朝刊）によりますと、最近また「地下教会」への締め付けが強化されているそうです。

　たとえば、最近中国から来日した女性信者は、次のように証言しております。

**「中国では献金で建てられた教会が当局によって取り壊されます。だから、信者は常に緊張しています。東京の上野の教会に来るとほっとします。」**と。

　とにかく、複数の現地信者によると、たとえば福建省では、約10年前までは、非公認の「地下教会」でも地元政府に宗教施設として届け出れば、比較的自由な活動が認められていたそうですが、近年は教会の改築、新築は一切認められなくなったそうです。それだけでなく、なんと建築中の教会が、当局者らに破壊されるなど明らかに締め付けが強化されているそうです。ですから、地元政府にたとえば抗議した神父さんたちが突然拘束される事件も相次いでいるとのことであります。

　ところで、イエスは派遣された先々で、まず、**「この家に平和があるように」**と分かち合うように命じておられます。つまり、わたしたちが、伝える最初のメッセージはキリストによる平和にほかなりません。

　ですから、イエスは、まず次ぎのような約束をなさったのであります。

**「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしは**

**これを、世が与えるように与えるのではない。」（ヨハネ14.27）**

　したがって、復活された当日の夕方、隠れていた弟子たちの真ん中に突然現れ、開口一番二回にわたって宣言なさったのであります。

**「あなたがたに平和」（同上20.19b,21b）**

しかも、二度目のときには、いきなり、**「父がわたしを遣わされたようにわたしもあなたがたを遣わす。・・・聖霊を受けなさい。」（同上20.23c）**

　つまり、イエスが与えてくださる平和こそ、派遣されたそれぞれの場で、各家庭にもたらす平和にほかなりません。とにかく、イエスの平和と派遣はつながっているのであります。ですから、ミサの終わりの派遣の祝福で、司祭は次のように宣言するのであります。

**「感謝の祭儀を終わります。行きましょう。主の平和のうちに。」**と。

　ところで、宣教の使命を明確にするために、次のように言うこともできます。

**「感謝の祭儀を終わります。主キリストの平和と福音を告げ知らせるために、喜びのうちに行きましょう。」（『子どもとともにささげるミサ』）**

さらにイエスが弟子たちに託したメッセージは、ほかでもなく**「神の国はあなたがたに近づいた」**にほかなりません。

　今週もまた、派遣されるそれぞれの家庭、職場そして地域において、平和と神の国の到来を告げ知らせることができるように共に祈りましょう。